
モンハンの世界に転生したらニャン子に転生してた。

なちす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンハンの世界に転生したらニヤン子に転生してた。

【コード】

N1980BA

【作者名】

なちす

【あらすじ】

神の部下のミスで転生することになった俺はモンハンの世界へ転生したが

アイルー・・・だと・・・!?

はてさてアイルーに転生した俺はどうなるのか!?

転生（前書き）

二作目です。並行して頑張っています。誤字脱字あると思います
が読んで頂けたら嬉しいです。

転生

俺こと武内タケウチ 徹はトオル

十二月三十一日

夜

八時三十分

帰り道で

同じクラスの女子に

殺された。

死ぬ寸前に見た彼女の顔は涙に濡れ、背後にある満月が彼女を照らす。

その姿は

美しかった

らん!!

まさか!?

『小説家になるう』よろしく神の手違いか!?
そうに違いない!!

「あの〜(汗)」

馬鹿な神だ。

神失格だな。

「聞いて下さ〜い(ウルウル)」

まさか本当にそんな神がいるとは思わなかった。

幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ幻滅だ
幻滅だ幻滅だ幻想殺した
なんちつて。

「私の話しをk」

ガンダムも見れないし。

万死に値する!!

「私の話しを聞いて下さい!!!(泣)」

ウオウ!?

敵襲か!?

「敵じゃありません!!死に神のタナトスです!!!(泣)」

目の前には背より大きく長い鎌を背負った女の子がいた。

タナトス？

神話に出てくる奴か？

「はい！」

タナトス（爆笑）は笑顔でそう言い返した。

「爆笑つて・・・酷い・・・（泣）」

おつといけない。紳士的な俺が例え神（大爆笑）でもレディとして扱わなければ・・・。
死んでしまったことに混乱してしまったが故の過ち。

「いえ。いいんです。殺してしまったのは私達、魂管理局の責任です。部下がミスをしてしまったから貴方は・・・。」

タナトスはボロボロと涙を流しながら言った。

まあ、いいことあるって。うん。（ぼーよみ）

「貴方は紳士なのか紳士じゃないのかハッキリして下さい（泣）」

へいへい。

「本当にわかってますか？」

HEY！HEY！

「わかってない!？」

一時間経過

つまり転生先とチート能力を言えば良かと。

「はい。そうです。」この一時間の八割は馬鹿な事をしていた俺達
だった。

それでは

モンハンの世界へ

「はい。モンスターハンターの世界ですね。（メモメモ）」

チートは

技術力が欲しい。

体力多めでニュータイプのような力が欲しいくらいかな？

「わかりました。他は何かありますか？」

後、記憶は消さないでよ。モンハンの世界の文字の読み書きは出来るように。

「わかりました。」

ボタンとメモ帳をたたむタナトス。

「準備はよろしいですか？」

ああ。

「ではいつてらっしゃーい！」

俺は意識を失った。

どうも。

クリスマスです。

いい名前でしょう？

けどね……。

「今日も可愛い子供達は元気だニヤ。」

「そうだニヤ。」

アイルーに転生かよ!!

こうして俺はアイルーとして生活することになった。

転生（後書き）

果たしてクリスはどうするのか？
次回は時間が飛びます。

感想・アドバイス待ってます。

日常（前書き）

主人公設定

学力は普通の高校三年生だがスポーツは桁が違つ。将来オリンピックに出ようと体力作りに必死だった。

後は発想が豊かでなんでも思いつくが技術力が無く人より多く練習しないと自分の発想をものに出来ずにいた。

モンハンやガンダムが大好きな紳士（？）である。

転生してからあることをキツカケに理不尽から護るために闘つ事を誓つ。

設定が長くなりましたがどうぞ！

日常

溪流

ケルビは逃げていた。

アレは突然現れ一緒にいた仲間二頭を射ぬいた。

故に訳もわからずケルビは全力で逃げていた。

走る

走る走る

もつと遠くへ……

そしてケルビは気づく。

何故視界がぼやけているのかを……。口の中が血の味でいっぱいなのかを……。

嗚呼……。やられたのか……。

そしてケルビは絶命した。最後に木から降りてくる片腕に小さな弓を装着して両手首に変なものを装着した一匹のアイルーを見ながら……。

百発百中!!! 今日も絶好調であるっっ!!!

あ、ども。アイルルに転生したクリスです。

アレから数年経ちました。今は村の警備やお肉確保を任されてる。村にはアイルルやメラルーしかいなくて村の皆と自給自足の生活をしてます。

因みに今ケルビを追うのに使っていたのは俺が頑張って掘り出した硬く、柔軟性が高い鉄鉱石で造った『アンカー』否、『ニヤンカー』だ。

ゼルダの伝説を思い出して造った代物で、俺ってばアイルルだから軽いじゃん？もう使い勝手が良すぎて移動手段や武器としても愛用してます。(ドヤア)

弓はテイルズよろしくティ○レイの使っている武器を造りました。もし、モンスターに接近された時を想定して造りました。モンスターの接近を許した時、弓に付けている隠し武器を使い近接攻撃をします。隠し武器は短剣です。(ドヤアドヤア)

だがここで疑問が生じる。なんでこんなに力があるのだろうか？体力はチートで上がったが力はそんなにないはず……。

そう疑問に思ってた時期がありました。

思うに、タナトスに頼んだ事を思い出して頂きたい。俺は

記憶もそのままに

と言った。

理解しただろうか？

つまりは

俺の脳内の記憶も引き継ぐと同時に身体の記憶も引き継いだのだ！
なんとも有り難い誤算だ。ちゃんと有効活用してる。

「クリス〜！」

おう？そうだった。説明してなかった。俺はこの世界に来て好きな
アイルーが出来て今では同棲している。

「リンカかニヤ。どうだったニヤ？木の実と八チミツは？」

「もう大量にあったニヤ！途中ケルビの死骸があったから回収して
きたニヤ。」

リンカの後ろには一輪車を引っ張っている二頭のガーグアが目に入
った。

「よし！後はコイツを載せて村に戻ろうニヤ！」

俺はケルビを一輪車に乗せてガーグアに乗り、リンカも乗ったのを
確認して村にむけて発進させた。

村は元々人が住んでいたらしく木が生い茂っている。工房もあり武
器や農具に家具を造ったりしている。村長の家の地下には開かずの
扉があり、調べているがわからずにいる。総計六十匹が住んでいる
村だ。

「そういえば本当にいいのかニヤ？オトモアイルーとして出世しな
くて？」

リンカは自分を責めながら言った。

「いいんだニヤ。俺はリンカがいるこの村で一生を過ごす決めたニヤ……。君と一緒にニヤ。」

「クリスノノ」

と、惚気話をしていると村についた。

「お帰りだニヤ！今日もいっぱいだニヤ〜。」

こいつはレン。俺と同じで外の警備と肉確保をしている。

「オウニヤ！狙った獲物は逃がさないがモットーニヤ！」

「そつえば村長が探してたニヤ。大事な話があるらしいニヤ！」

リンカは心配そうに見つめてきた。その頭にポンと手をおき優しく撫でた。

「大丈夫だニヤ。多分俺にしか頼めない依頼なんだと思うニヤ。」

「でも……。」

「晩飯には帰って来るニヤ。上手い料理を頼むニヤ。」

俺は村長の家にむかった。

それにしても最近辺りが妙に静かで気味が悪い。ジャギイも見えない。

そう考えると

「よう！兄ちゃん！何か食ってけニヤ！」

この気前のいいアイルーはダンチ。コイツの作るおにぎりがとても美味く店を経営している。

「サンキューニヤ。」

好意には甘える俺である。

「クリス・・・気にニヤるか？今の溪流の様子が。」

「ああ。ケルビを見つけたのも偶然だニヤ。静か過ぎて嫌な予感があるニヤ。」

俺は眉を細めながら言った。

「多分だが村長に呼ばれたのはその事もあると思うがニヤ・・・最近隣の村から全く連絡が来ないのニヤ。それもあるかもニヤ。」

隣の村か・・・。少し遠いところにアイルー達が住む村がある。何故か最近連絡がこない・・・。そしてニュータイプの感が告げる。何邪気がさ迷っていると。

「ダンチ。一応逃げる準備をしとけニヤ。」

ダンチは真剣な顔で

「わかったニヤ。他の奴らにも伝えとくニヤ。まあ、クリスの言ったことは大半は当たるからニヤ。」

「すまないニヤ。それじゃ、村長のところに行ってくるニヤ。」

俺は立ち上がり、行こうとすると

「村長はカブレライトソードが刺さってるところを右に行ったところだからニヤ？迷うんじゃないニヤ。」

「子供扱いしないで欲しいニヤ。」

ニヤハハハハ！と笑いながら俺は村長のところへむかった。

目の前にカブレライトソードが見えてきた。これはやはりアイルー達が住みはじめたところからあるらしい。古い物でも頑丈さは衰えてはいない。

俺は右に曲がり村長のいる家についた。

「村長。入りますニヤ。」

と言いながら入ると村の大事な秘玉を見ている髭がはえたアイルー、村長がいた。

「きたかニヤ。わかってる通りだニヤ。隣の村から連絡がこないニヤ。何かあったに違いないニヤ。クリス、お前には隣の村へ今晚向かって欲しいニヤ。」

まあ、わかっていたことだ。こうなることは。

「後、逃げる準備をしたほうがいいニヤ。邪気を感じるニヤ。」

「わかったニヤ。気をつけて行くニヤ……。」

俺は家を出た。そして我が家にダッシュで帰った。

俺はリンカの作った料理を味わった後すぐさま荷造りをして家を出た。

「気をつけてニヤ。」

リンカはとても心配そうだった。

「いいかニヤ？逃げる準備はしとけニヤ。俺が帰りが遅くなっても絶対先に逃げるニヤ。大丈夫。すぐ追いつくニヤ！」

そう言って俺はニヤンカーを使い渓流を駆け出した。

「ニヤんだ？これ？」

俺は呆然としていた。

村が破壊されていた。

いつまでそこに立っていたかわからなかった。

「だ……誰か……いるのか……ニヤ？」

その小さな声を聞き我に帰った俺は声の聞こえたところにむかった。

そこにはボロボロになったアイルーがいた。

「しつかりするニヤ!!」

俺は揺さぶった。

「雷狼竜……ニヤ……。私の事はいいニヤ……。早く村に……。」「

アイルーは息を引き取ってしまった。

「オイ……。!……。クツ!早く村に……。ツ!?!」

邪気が急に我が家のある村に向かっていているのを感じ取った。

「マズイニヤ!村が!!」

俺はニャンカーを使い近道をしながら溪流を駆けた。

村に帰ると俺に待っていたのは

地獄だった。

日常（後書き）

次回！

クリスに待っていたのは絶望と悲しみと怒りだった。「俺・・・決めたニヤ。復讐ではなく！ハンターとしてでもなく！！俺とこの力^{チート}で理不尽と闘う！！だからリンカ・・・俺・・・行くよ。」
そして対峙する。

雷狼竜と一匹のアイルー（チート）が繰り広げる闘いのゴングが今鳴り響く！！

感想・アドバイス待ってます！

猫（チート）対雷狼竜（前書き）

ユニコーンのサントラ聴きながら書いてました。

猫（チート）対雷狼竜

辺り一面家屋は破壊されいたるところにアイルーやメラルーの死体があった。

「リンカ・・・リンカ!!」

俺は走った！足の裏が痛い。ガラスの破片を踏んだからだ。それよりも!!

リンカは!?

リンカはどこだ!?

俺は走る。

走る

走る走る!

走る走る走る!!

息なんて切れない。疲れなんてない。怪我なんて気にしない!リンカだけでも無事なら俺は・・・!!

俺は我が家に着いた。扉の前にはボロボロになった

「リンカアアアア!!」

リンカが倒れていた。

「リンカ!しっかりするニヤ!!」

声が聞こえた。その声は聞き覚えがある声。愛しい彼の声が・・・。

「クリス?」

「リンカ!!」

嗚呼。彼が泣いている。私は痛みを我慢しながら腕を上げて彼の頬に触れる。

「變つて……。」

變っているニヤ。

「……………」

「……………」

「りんか？」

「……………」

「……………」

「りんかぁー！」

「……………」

「……………」

「ッ！！！！リンカアアアアアアア！！！！！！」

私は貴方の中で生き続ける。生きて。クリス。

こうしてリンカは死んでしまった。

「復讐……かニヤ……。」

俺はリンカをベットに運び寝かせる。そして必要な武器を装着して決心する。

「リンカ……。俺……。決めたニヤ……。復讐ではなく！ハン

ターとしてでもなく！俺とこの力チートでこんな理不尽を破壊するニヤ！
だから……。リンカ……。俺……。行くニヤ！！」

俺は邪気を強く感じるところへニャンカーを使って飛びたった。

雷狼竜ことジンオウガは今無性に苛立っていた。

ハンターが住みかとしていた所を荒らし、追い出したからだ。

苛立ちを無くすため村を破壊しストレスを解消していた。

今もそうである。

あの時の事を思い出すだけでイライラする。

ヒュッ

？

上か？

そう思い上を見ると何もなかった。しかし

ヒュッ グサッ

何かが胸に刺さり悲鳴をあげそうになった。

人間か！

そう思い前を見ると、もの凄いですピードで突っ込んでくる大きな武器を持ったアイルーが目映った。

「ここから……。」

ジンオウガは威嚇しようとしたが刺された所に違和感を感じ見ると刺さった所からワイヤーらしき物が伸びていても凄いい勢いで巻かれていく。視線を戻すとアイルーは目と鼻の先にいた。

そしてジンオウガの腹に取り付いたアイルーは大きな武器を腹に当たって叫んだ。

「ここから……出てけえええ!!」

アイルーは何かを撃ち込んだ。

どうだ!!パイルバンカー試作一号は!!

おう！クリスだ！今、戦闘中だが持つてる武器の説明をさせてくれ！

今撃ち込んだのはパイルバンカー。まだまだ試作品であるが対巨竜爆弾よりも威力は上。改良するには飛竜の素材を使わなければならない！撃つたら撃ち込む方は壊れてしまい一発限りの秘策だ！

ジンオウガの腹から夥しい量の血が溢れ出た！！

「ギオオオオオオン！？」

何が起こったのかわからず泣き叫ぶ！

この隙を見逃さず俺は一気に離れ首の方に飛びのり弓に付けていた短剣を取り出し、俺が『毒テングタケ』と『シビレダケ』を調査した『クリス スペシャル』を入れた壺に短剣を入れて『クリス スペシャル』をふんだんに塗る。

この間三秒

そして

「これでも喰らえ！！」

グシュッ！！

ジンオウガの眼に短剣を刺した！

堪らずジンオウガは悲鳴をあげて暴れようとしたが身体全体が痺れ出して動かなくなった。

俺はニヤンカーを使って丁度近くにカブレライトソードを引き抜き空へ投げる！

俺はニヤンカーで木に飛び移って行きながらカブレライトソードをまた空高く放り投げて最後にカブレライトソードを掴み回転した。落ちる場所は丁度ジンオウガの首を切れる位置だ！

俺は破壊力をつけるために何回も丁度切れるベストなところになるように調節しながら回転して叫んだ！

「あんただけは………墮とすニヤッ!!」

思いつ切りジンオウガの首にカブレライトソードを叩きつけた

俺は地面に刺したカブレライトソードに村の皆の名前を彫っている。

・・・ダンチ、レン、村長・・・リンカ此処に眠る

俺はリンカに告白した時にプレゼントしたネックレスを首にかけて黙祷をした。

あれから三日経った。

俺は隣の村の墓と此処の墓を造るのに必死だった。黙祷を終えた俺は開かずの扉へ向かった

実話、ジンオウガを倒したあの日・・・村長の家の地下にある開かずの扉に変な玉を入れる窪みを見つけ村の秘玉をはめると開かずの扉が開いた。

中は村にあった工房よりもいい工房があり、倉庫には沢山の種類の鉄鉱石が山ほどあり、テーブルには手紙があった。

『クリスへ。

貴方の願い事の他にこんな物も送つてきました。この施設は必ず貴方の力になります。モンスターの素材は自分で集めてください。後の素材はおまけとして付けておきました。在庫は限りがあるので注意して下さい。

貴方の未来に幸せがあらんことを・・・。

タナトスより。』

まったく最高の贈物だ。

リンカ・・・見ててくれ・・・。

俺の生き様を・・・。

そしてジンオウガから採取した素材を担ぎ工房の中へ消えていった。

•
•
o

猫（チート）対雷狼竜（後書き）

次回

あれから数年経った。

俺は新しく出来た武器と装備で困っている者達を助けるため動き出す！

インパルスが出てきた時のあのBGMを聞く準備を！

感想・アドバイス待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1980ba/>

モンハンの世界に転生したらニャン子に転生してた。

2012年1月6日01時49分発行